

野の師父 野村胡堂・あらえびす

——「自地域学」と社会科学教育の結合を探求しつつ——

箱石 匡行*

(1996年11月28日受理)

Masayuki HAKOISHI

A Fatherly Master of the Field, Kodo=Araebisu Nomura
— In Researching for the Connection between “Domestic Studies”
and Social Studies —

はじめに

野村胡堂・あらえびす、これは野村長一（のむら・おさかず）の二つのペンネームを結びつけた表記である。彼はこの二つのペンネームを使い分けている。小説や一般的な評論を執筆するときには野村胡堂と署名し、音楽関係の評論や著書では「あらえびす」というペンネームを用いているのである。したがって野村長一である野村胡堂・あらえびすの業績は、つぎのような三つの領域に分けて考えることができるであろう。

- (1)大衆文学作家とくに銭形平次捕物控の作者としての野村胡堂
- (2)西洋音楽の紹介者、レコード音楽の評論家としてのあらえびす
- (3)野村学芸財団の創設者としての野村長一

それでは、いったい、どのようにして野村長一がこのような仕事をするようになったのであろうか。また彼がそれぞれの領域でなぜ、このような業績を遺すことができたのであろうか。もしこういったほうがよければ、野村長一はどのようにして野村胡堂・あらえびすとなることができたのであろうか。ここでわれわれが試みようとするのは、野村胡堂・あらえびすの生涯と業績を岩手の風土性との関連において把握するということである。このことは、社会科学教育を「自地域学」(domestic studies)との関連において捉え直そうという観点から¹⁾、そして今日の道徳教育の地域教材を開発するという観点からも必要なことであろう。とくに後者の点についていえば、野村胡堂の人生がすでに道徳教育の教材のなかに岩手県郷土資料の一部となって入っているのである²⁾。

*岩手大学教育学部

